

ポストモダン状況における主体の崩壊

——“Rabbit” Angstrom の場合

鴨 川 卓 博

はじめに

時代の姿を活写するジョン・アップダイク（John Updike, 1932-）の Rabbit 四部作（一冊にまとめられて *Rabbit Angstrom: A Tetralogy* [1995] と名付けられた。以下 R.A. と略記）は、1930年代不況のどん底に生まれた一アメリカ市民、Harry（“Rabbit”）Angstrom の社会人としての一代記である。この連作には、1950年代後半から1980年代終わりまでの、アメリカの政治的・経済的、社会的・文化的な状況や変化が、ほぼ10年おきにリアルに再現・記録されている。およそ40年にわたるこの間の歴史をアップダイクが記録した意義あるいは狙いについては別に論じた¹ので、本稿では、この歴史的变化のなかで生きる人物の生きざまを、ディテールを備えたテキスト空間（作品世界）において、現に起こりつつある出来事を担う主体（主語）、あるいはそれに弄ばれる人間（客体）の姿として、分析・考察する。

R.A. は、現代世界、少なくとも1960年代以降のアメリカを、統一原理が見いだせない、断片化した、ポストモダン状況にあると見なしている。従って、小論では、そのような状況のなかで、一市民にいかなる対応があり得るのか、あり得るとみているのかということを検証することになる。論じるにあたっては、そこに表現されている認識を、作中人物のもの、語り手のもの、作者（あるいは「作者」）のものに区別しない。その意味で、おおざっぱな言い方で、認識論的なアプローチということになるだろうが、哲学的議論をする能力もないし、それをやるつもりもない。

1. 四部作における歴史

まず、前提として、Rabbit 四部作の歴史的時期を確認しておく。アップダイクの説明によると、*Rabbit, Run* (1960, 以下 *Run*) は1959年3月20日から6月24日、*Rabbit Redux* (1971, 以下 *Redux*) が1969年7月16日から10月下旬、*Rabbit Is Rich* (1981, 以下 *Rich*) は1979年6月23日から1980年1月20日、*Rabbit at Rest* (1990, 以下 *Rest*) では1988年12月28日から1989年9月22日のあいだとなっている (R.A. xxiv)。ここでの歴史は、現在の出来事であって、関わりのある過去は数年前からせいぜい1930年頃までである。そしてこれらは、一民族、一国家の歴史や命運などとはまったく無関係で、一市民 Harry との関わりにおいてのみ意識され、意味を持つ。*Run* の場合であれば Harry の高校時代以降のこと、*Redux* の場合は、現にアメリカでそして世界で「いま」起こっている事柄や状況のみで、起こっていることでも Harry に直接関係がない限り、それは断片的なニュースでしかない²。まして過去の出来事などかまっている暇はない。パーキンソン病で Harry に会いたがっている母親の見舞いを一日延ばしにする Harry の対応は、このような時代状況の象徴とも読める。この作で過去といえは、唯一、黒人革命家 Skeeter にむりやり読まされる *Life and Times of Frederick Douglas* (1882『フレデリック・ダグラスの生涯と時代』) である。これすらも「良心覚醒授業」(conscience-raising session) として強制されるものであって、自発的に過去と繋がるものではない。Harry にとっては、これも、目まぐるしい時代の変化が要求するパラダイムの転換ができず、主体的に現実に対抗できないでいる間に彼の生活に侵入してくる「現在」の一部なのである。*Rich* での過去は Harry のこれまでの生涯での出来事 (つまり、前2作での出来事) や両親の思い出などで、アメリカの過去も世界の歴史も問題にならず、「いま」とは関係ない。これは *Rest* でも同様である。第二作以降は、Harry の生涯における過去の出来事がしばしば思い起こされるが、現在の事態や状況との関連においてでしかない。*Rest* の後半で Harry が Janice から贈られた

Barbara Tuchman の独立戦争を扱った歴史書 *The First Salute* (1988) を読んでいるのは、過去を現在から切り離された物語、彼を愛国的気分に浸らせてくれる伝説とみなしているということであろう。彼はこれを数ページ読むと眠られるのである。

その代わり、それぞれの作品が描く10年毎の特定の期間に起こった大小さまざまな出来事が、いろいろな形や意味合いで、テキストのなかに取り込まれる。その一部をアット・ランダムに並べておく。冷戦、ヴェトナム戦争と反戦運動、1960年代を中心とした黒人暴動とエスニック・アイデンティティの主張、対抗文化の台頭と流行、女性解放運動と実生活におけるフェミニズムの浸透、ピルの解禁と性秩序の崩壊、AIDS と麻薬の浸透、アポロ11号の月面着陸に代表される技術革新、1979年の石油危機、ドイツや日本のアメリカへの経済進出、イラン革命とアメリカ大使館占拠人質事件、ソ連のアフガニスタン侵攻、1988年暮れのパンナム航空機103便の爆破事件など世界各地で起きたテロや航空機事故、スリー・マイル島の原子力発電所の事故、ドライ・ラマのチベット脱出、エドワード・ケネディのチャパクイディック島での醜聞、ボエジャーIIの飛行、スカイラブの落下、さらには野球選手の安打記録など。ケネディ兄弟、キング牧師、マルコム X らの暗殺、学生運動、ニクソン大統領とウォーターゲイト事件、イラン・コントラ事件等々にも言及される。Harry が新聞を開いたり、カー・ラジオをつけるたびに、それらの見出しが飛び込んでくるのだ。加えて、流行した歌の題名、テレビの番組や映画の題名、歌手や俳優の名前、多種の商品名、自動車名から、ハイウェイ沿いの看板の記述まで取り入れられる。時代の姿が、個別的具体的な好みや流行として、個人の生活に関わったことを記録しているのである³。

2. パラダイムの崩壊

Run から Redux を経て Rich に至る過程は、いわば認識上のパラダイム転換の過程である。超越的、統一的 세계観・価値観（リオタールのことばで言えば、「大きな物語」）をもつパラダイムから、不確定で断片的なポストモダ

的なそれへの転換である。*Run* では、Harry はまだ古い1930年代以来（モダニズム）の認識に立っており、旧来の価値観が現実生活のなかで意味を失いつつある確実ではあるが微妙な状況の変化に、気づいていても対応できないでいる。個人の誠実さと努力に基礎をおいた1950年代末の小都市における平均的アメリカ人の認識を代表している。まだ自分が直面している問題がより大きな歴史的転換の一部であるとは意識していない。彼の不満と不安⁴は個人的なものであると感じている。それ故、絶対の自由を求めて逃げ出そうとするのである。具体的な変化が歴史的なものとして、Harry の目には見えないのだ。目につくのは彼が車で走る道路ばたの景色や看板の記述、聞こえるのは車のラジオから流れる直接彼の生活と関係のないニュース（ダライ・ラマのチベット脱出など）や音楽の曲名などである。それらは断片的で何らかの方向を示すようにはみえない。路傍のガソリン・スタンドの店主の忠告⁵や、高校時代のバスケット・ボールのコーチ Tothero が教えたことと時代とのずれ⁶を本能的に感じてはいても、Harry がその意味を理解しているわけではない。

Redux はそれまでの認識が明瞭に破壊されてゆく過程である。1960年代は政治的な時代で、「南北戦争以来もっとも異論の多かった時代」⁷ だった。表面化し、激しく対立しあう価値観の推移にともない、パラダイムの転換が明白に要求された。しかし、代わりは見つからず、混乱のまま、古い認識は確実に無効になってしまった。*Redux* はこうした10年期末における小市民の家庭生活の状況である。社会の出来事と個人の家庭生活の結びつきが連作のうちでもっとも顕著に、直接的に表面化する。Harry はこの混乱のなかで、既に前作で見失っていた自分の主体性の崩壊を直接体験することになる。妻には浮気され、黒人と対抗文化に白人中流男性としての権威を失墜させられ、技術革新は彼の職を奪う。

Rich は経済が中心。1970年代末の第二次石油ショックのさなか、ガソリン・スタンドには行列ができ、給油をめぐって暴力沙汰さえ起こっている。自動車の燃料タンクに錠がついていることがセールス・ポイントになるほど

の状況だ。自動車を代表とするドイツや日本の経済進出は著しく、アメリカの政治的・経済的権威の相対的失墜は誰の目にも明らかである。インフレは進行し、ドルの価値が急速に低下、金、銀が値上がりしている。コンシューマリズム（消費主義）が流行、『コンシューマー・レポート』誌が聖書のようになる。これ以後、作品中では、自動車の売れ行きが大きなトピックになる。Harry がトヨタ・ディーラーになっている故であるが、経済の成り行きが大きな歴史上の力となって個人の生活に影響を及ぼしていることの現れでもある。自動車はシフが指摘する（Schiff 54-55）ように典型的にアメリカ的な製品＝消費財で、富と移動性（mobility）の象徴である。そのような状況の中で、一般市民は、とりあえず、その場その場で状況に対応する。

60年代は政治的な時代だった。露骨にパラダイムの選択を要求した。70年代はその後遺症を引きずってはいるが、市民たちは政治（パラダイムの選択）を棚上げにして、経済（生活）に関心を向けた。日々の生き方にも、消費者運動にも、その裏に中心となるイデオロギーがあったわけではない。統一的な認識、パラダイムの獲得は棚上げされ、プラグマティックに現実に対応することを選んだのだ。だから、Harry のような古い統一的世界観を抱いてきた者には、たまたま現実との対応が巧くいっていても、必ずしも居心地のいいものではない。Rich がどこか笑劇的な印象を読者に与えるのはこの所為である。

Rest に至って、新保守主義の流れのなかで、世間は再び個人中心の価値に回帰する。Harry は、やっと消極的にではあるが、この断片化した現実を受け入れ、“Enough” と最終的に落ち着く。しかし、ここでも、ボエジャーⅡの飛行や野球選手の記録（R.A. 1249-50）を除いて、言及される時代の動きは、パンナム航空の爆破を初めとするいくつかの航空機事故、AIDS と麻薬、ハリケーンの接近など、死と破壊、混乱と不満の予兆となって、外見的には繁栄、余暇を謳歌している Angstrom 一家や彼の周りの社会を公然と脅かしている。そんな時代に、ハリーは価値の明瞭であった時代（独立戦争時代）の歴史を読むのである。

3. 生きる主体と主体としての時代

R.A. の40年間には、価値観は、信仰と個人の誠実さと自立精神に立脚する「アメリカ的生活様式」から、不確実性の時代、文化的・政治的多元主義、新しい平等主義へと急速に転換した。市民生活では、政治的主張から経済中心の技術革新による情報化とコンシューマリズムへの移行が起こった。そして結局、用心深く曖昧な立場をとる小市民たちは、個人中心の価値に回帰した新保守主義を選ぶ。それは、超越的な主体観が崩壊し、新たなパラダイムが自己の主体性に何等の保証も与えないまま、受動的に、実存的に、そしてテンタティヴに状況に対応する以外に、生きる主体としての市民には道がなかったことを意味する。

こうした状況への Harry の対応をおおざっぱに追う。既に *Run* で、高校時代の記録保持者という（1950年代的）ヒーロー意識と時代状況とのずれが露呈する。超越的な主体観が払拭できないのだ。冒頭で、勤め帰りに道ばたで子供たちとバスケットをして、久しぶりに高揚感を抱いた時、自分の身体が往時（高校時代）とは違っていることに気づくにもかかわらず、その意味は理解できない。Harry はこのとき既に変化した身体状況の下で以前のような主体ではなくなっているものであり、彼が「逃げる」べき相手は刷り込まれた時代遅れの英雄像、前世紀から受け継いできたパラダイムなのであるが、彼にはその自覚はない。ただ、ガソリン・スタンドの親父の助言を否定することで示されるように、直感的・本能的に現実から逃げているだけなのである。

社会的・政治的、そして技術的にも激変の時代であった *Redux* でも、変化が根本的に人間、そして主体に対する認識の転換を要求するものであると、Harry は認識していない。個人の主体にではなく、人種などの単に社会的な枠組みに関わるものであったと考えたのであろう。妻には不倫をされ、家を焼かれ、娘のようなガールフレンドを失い、息子 Nelson には「殺してやる」（R.A. 544）とまで言われる Harry が勤め先を蹴になるが、このことは、われわれの観点からの四部作におけるこのテキストの意義をよく示している。

Redux は、決して Harry を元の状態には「戻さ」ないのである。家庭における立場でも、社会においても、技術の面でも、Harry はもはや自分の人生の主体ではないのである。皮肉な言い方をすれば、*Run* ではまだ Harry は「逃げる」という消極的行為の主体であり得たが、*Redux* ではもはや彼は「逃げる」こともできないのだ。一見、Harry を犠牲者の立場に落とす黒人ラディカル Skeeter にしてからが、結局のところ、時代の流れ（風潮）の犠牲者でしかない。次作では彼は警官隊との撃ち合いで殺される。もちろん、良心的な Jill など、自分がそう受けとめた時代の要請に応じて、自ら身を投げ出すのだが、主体としての意義も機能もまるでない。超越的な主体意識を捨て、時代の流れ（変化）に合わせることができれば、*Rich* の Harry のように、「成功者」となり、一応主体のように振る舞い得るのだが。

経済の10年期であった *Rich* で金持ちになった Harry の姿に、翻弄される（というより意味が希薄化される）人間がより鮮明に（印象的、かつ滑稽に）表象されている。ここでもパラダイムの転換はなされていないのだが、Harry は「成功者」となり、一応主体のように振る舞っている。これは認識のパラダイムを転換しなくても、一時棚上げしてプラグマティック（あるいは実存的）に対応するだけで対応が可能であるということだ。その場合、断片的な状況認識が重要になる。大事件がなくとも、世間の動きに注意していることが必要なのだ。友人たちからの情報と『コンシューマ・レポート』誌の記事が彼に助言を与えてくれる。

Rest で、息子 Nelson の使い込みを疑う Harry が昔の Janice の愛人であり社員であった Charlie Stavros に相談を持ち込むとき、彼は自分が Charlie の勘を評価していることと、商売が低調な朝、二人がしばしばニュースを焼き直し（確認）したということが語られるが、これは Harry が時代の変化を意識してはいたが見通しをもつことができなかった、つまり、主語（主体）として状況に対応できないことを知っていたことを示すものといえよう⁸。世の中の動きが決定的な影響をもつ、すなわち、状況が主体で彼らは客体でしかないということを感じていても、「大きな絵」（全体的見通し）は Charlie

の勤に頼るのだ。Harry は現代人としては若死にする（60歳前）が、彼のような不器用な人間は時代に不適合で、死ぬしかないということだろうか。

ここで各作品における Harry の職業の意味を確認しておこう。Run では、MagiPeel Peeler という台所用品会社の皮むき器の販売プロモーターとして、店頭でデモンストレーションをやっている。いかにビタミンを壊さないで手際よくジャガイモなどの皮がむけるか、通りすがりの主婦たちに説明するのである。「現代主婦のパス・ワード、マジピール皮むき器でヴィタコノミー [ビタミンとエコノミーの合成] を」(R.A. 11)、という具合。説明がインチキであることは Harry も聞く側も承知のことであるが、好ましければ、それでいい。世界はそれで成り立っている。科学知識を不正確に利用した広告による販売促進。それが眉唾であると承知のうえでの宣伝による消費拡大。これが20世紀半ばの消費社会の典型的な相のひとつであることは言うまでもない。後に家を逃げ出して失職、Janice の父親の自動車販売店に雇われるが、ここでも消費を勧める仕事だ⁹。

Redux では、父が手組みの植字工として働いているヴェリティ印刷会社で、ライノタイプのオペレーターをやっている。ライノタイプは行単位で活字を鑄造する機械で、タイプライターのキーと活字鑄造機が連動している。手組みと比べて機械化されており、技術の進歩が取り入れられている。しかし、1960年代末のいま、多数の部品でできている、溶けた鉛で活字を鑄造するこの機械、機械時代の花形ではあったが、既にフィラデルフィアで大手のオフセット印刷所が採用している写真オフセット、写真製版、そしてコンピュータ印刷という高度のテクノロジーを利用した製版・印刷システムと比べれば時代遅れである。やがて棄てられる運命にあり、この作の終わりで Harry は失職する¹⁰。Redux に現れる高度のテクノロジーは、急速に発展した知識集約型の技術で、機械的な技術と比べて、現前性が低い。エピグラフとしてとられたソ連の人工衛星ソユーズの乗組員の会話や月着陸船とアポロ11号とのやりとり、ロケットの発射と月面着陸のテレビ中継に明示されるように、

高度に処理されて提供されるものである。

Rich の Harry は株を 4 分の 1 所有するトヨタの代理店スプリング・モーターズ社の経営責任者である。石油危機のさなか、燃費のよい日本車は売れ行きがよく、会社の経営は好調そのもの。余裕ができた資金で金や銀の取引をしていっそう稼ぎ、ついにはその儲けで念願の自宅を購入する。居間が数段低くなっている流行の高級住宅である。^{マネー}金のマネージャでもあるというところ。Rest でもこの状態は続くが、経営を息子に任せて半分引退している。半年はフロリダで月次報告を読むだけで仲間とゴルフをしたりしている。

Harry には存在認識としての主体観念はない。Run においては、せいぜい行動の主語としてのものであり、自己と他者の関係に関してすら常に自己中心的。他者を対立する存在として把握しているか否か明瞭でない。他者としての Janice も、彼の観点からは、彼に従属するもので、彼に反抗的であったり、彼の意に添わなかったりする存在でしかない。Ruth は彼の願望を充足させる従属的な存在で、彼に一定の実在感を与えはするが、それ以上ではない。彼が絶対的な意味で他者を意識するのは、娘 Rebecca が溺死した時、ゴム栓を抜いて浴槽の水を流して Rebecca の命を救わなかった全能の神に対してである¹¹。

Redux では存在や行動の主体・主語としての自己は大きく後退を余儀なくされるが、それでも主体喪失の意識をもったり、疑ったりする様子はない。黒人の社会進出と偏在は人種差別主義者 Harry を当惑させるが、印刷所の同僚 Buchanan に誘われて訪れた黒人バーで黒人歌手 Babe の歌を聞いて、“black others” とここにいることを意識すると同時にあふれる喜びも感じるのである (373)。OPEC や石油メジャーや連邦政府の政策が Harry の販売会社を繁盛させ、彼を豊かにしたと分かっている Rich においてすら同様である。考えることを止めてせつせと状況に従っているだけだからだ。心筋梗塞の発作を起こして、絶対的な他者である死がすぐそばにいるようになった Rest ではじめて Harry は他者（死）の存在を無視できなくなる。Harry は孫娘の

希望で独立記念日にアンクル・サムの扮装をしてパレードに参加する。このとき背の高い彼をみて往年のヒーローの姿を思い起こして歓声を上げる群衆に Harry は満足しながらも、行進の最中に心臓発作を防ぐためにニトロ錠剤をポケットから出して飲む。これがその象徴的な表象である。しかし彼にできる唯一の「主体的」行動は心臓病の処置方法の選択だけである。それとても全面的なものではなく一時的に死を繰り延べるだけのものである。Rest の終わりで、いよいよ逃げ場がなくなったときに激しいバスケット・ボールの動きを選ぶことを、自ら死を呼び寄せる行為だと解するならば、それが精一杯の主体的なしかし破滅的な行動ということになる。

このように、Harry にとって、主体とは行動主体、動詞の主語となることと同義で、それ以上でも以下でもない。とすると、それは「身体」的なものである。四部作では身体が大きな意味を持っている。セックス、スポーツ、さらには病気、節度のない食事などが、主題としてあるいはモチーフとして、主体の身体性の表象となっている¹²。本論ではこれを論じる余裕はないが、一例を挙げておく。Run の冒頭で Harry は少年たちとバスケット・ボールをし、息を切らせ、体が重く感じながらも、高揚感を抱き、憂鬱を吹き飛ばすように感じる。Rest の終わりでは、ニトロ錠剤をのみつつも、“the rhythm, the dance, the whatever it is, the momentum, the grace” (R.A. 1510) を失うのを恐れて若者とゲームを続ける。ジャンプしてシュートしたとき、上半身が引き裂かれるような痛みが走り、内部から破裂するようになって、倒れ、気絶する。これはまさに身体そのものが Harry を支配した瞬間である。

4. 情報と商品化 (commodification)

この40年はまた情報メディアが革命的に変化した時代でもあった。テレビは世界を小さくし、Harry が子供時代にはそこに行くことなど考えもしなかったフィラデルフィアもまるで隣のように感じさせる (R.A. 812)。テレビは、それまで身近に感じられることのなかった全国各地や外国での出来事を、国中にほとんどリアル・タイムで報道するようになった。それも、映像化さ

れて、市民の居間まで届けられる。この事実が、*Run* では、テレビ番組“Mouse-ke-teers”を音を消して見ている Janice にも、Harry にも、まだ自覚されていないが、*Redux* では、世界的・社会的大事件から些細な日常の出来事まで、さまざまな外の世界のことが、報道されるニュースとなって、個人の領域に侵入する。ヴェトナムでの戦闘とワシントンでの反戦デモや、西海岸の都市での暴動とそれを鎮圧する警官隊の銃撃が、近隣での事件と同様にリアルに伝えられ、ペンシルベニアの小都市に住む市民たちに動揺を与え、それに対してイエス・ノーを表明することを要求する。こうして、世界のさまざまな出来事が直接的には無関係な市民一人ひとりの家庭内の個人的な問題となり、彼らの思考や感性に大きな影響を与える。*Redux* で Jill と Skeeter が Harry の家に住み込むことは、ニュースの見出しが家庭の居間に侵入してくるものの象徴なのである。

また、メディアによる情報は市民を情報の消費者にする。メディアによる関心の喚起は、60年代以降特に激しく、かつ多様化し、それ以前——例えば40年代とは様相を一変させた。それ以降、世界観・価値観が多様化し、ビジネスと化したメディアが、社会のそれぞれのセクターが抱く関心や利害に応じて報道する結果、ニュースの相当部分が、一市民にとって、自分たちの日常とは隔たった、ばらばらの、多くの場合相容れない情報となった。

しかし、60年代のテレビと80年代のそれが市民生活に対して持つ意味は大きく違う。60年代に居間に侵入し現実の生活に暴力的な影響を及ぼした外部世界の出来事は、80年代には、“couch-potato”という語が示すように、現実感の薄い単なる消費される情報と化した。ソファーに座ってフライド・ポテトを食べながらテレビを見る、つまり、テレビ画面の映像を自己とは無関係な笑って消費する情報とみなしたというのである。ウッドが言う (Wood 146) ように、家庭生活も商品にされて消費されるものとなった。シット・コム (sit-com = situation comedy) がそれである。シット・コムでは、頻繁に挿入されるコマーシャルのためストーリーは断片化され、舞台の上で再現されて分断化された個人の生活 (の一部) として見られ (つまり消費され) る。そ

して、画面外の笑い声の存在によってこのことが明示される。つまり、テレビで放映されるシット・コムを居間で見るという行為には、逆方向からみて、テレビを見る（＝情報を消費する）こと、舞台上で演じられる個人の生活を見て笑い声を発すること（＝人生の情報化、消費物化）、個人の生活が舞台上で演じられる（＝個人の人生の分断化、情報化）という三つのことが同時に関わっているのである。すべては現在時制で進行しており、ここには、歴史性、論理性、統一的な原理、大きな物語、あるいは象徴性すら認められない。人生は断片にされ相対化されて現実感が希薄になる。このドラマを見ている視聴者は刺激の乏しい自分の人生も、倦怠と喪失感を除けば、シット・コムと区別がつかない。半ば引退した Harry は次のように考える：

TV families and your own are hard to tell apart, except yours isn't interrupted every six minutes by commercials and theirs don't get bogged down into nothingness, a state where nothing happens, no skit, no zany visitors, no outburst on the laugh track, nothing at all but boredom and a lost feeling,...
(R.A. 1476)

また、ニュース自体も消費の対象となる。*Rest* におけるマナティの回遊状況の逐次的報道とハリケーンの進路に関するテレビ・ニュースの扱われ方がそのよい例で、いずれも Harry 個人と彼の生活に（直接）影響しないが、テレビがそれを逐一報道する¹³ことによって消費される話題となる。挨拶代わりに人々に消費されるのだ。報道されることによって一時的に市民の欲望ないし興味を引き起こし、それらを所有あるいは消費せしめる。もっとも、ここでいう所有あるいは消費はヴァーチャル（疑似的）なもので、ほとんど実体をもたない。

5. 情報化とヴァーチャル性と遊離感

情報化は、テレビ・コマーシャルに典型的に示されるように、商品情報（広告）から種々のニュース、はては古典的名作まで、商品化して流通経路に乗

せる。そこでは、人間の感情を含めて、あらゆるものが商品化されるのだ。そして、世界は現実感を希薄にし、固定化、類型化、断片化された映像となってしまう。Restで Angstrom 一家が走る高速道路沿いの看板¹⁴やテレビの番組が典型だ。これはすでに Redux でアポロ11号による月面着陸の発進から帰還までのテレビ中継を、時には音声を消して、Harry [人々] が見ていたときから示されていた。実際すごいことが現実には起こっているのに、音声を消したテレビ画面は現実感に欠けるのだ。どこか現実から遊離した感じを否めない。

前述のように、Redux 以降は、歴史的出来事がリアル・タイムで文字化・映像化されて、その同時間に生きる個人 (private citizen) にヴァーチャルな体験を強いるが、それらは、断片化され映像化されているため、当の個人に大きな影響を及ぼしているにもかかわらず、現実感を与えない。ボードリヤールが指摘している¹⁵ように、メディアによって映像として提供される情報は疑似化、シミュラクラム (おもかげ、像) 化されているからである。麻薬の影響下で妻に暴力を振るったあとで Nelson は、そのときの自分の心理状況を次のように言う：

But when I went after Pru that way tonight it was like a monster or something had taken over my body and I was standing outside watching and felt no connection with myself. Like it was all on television. (1287)

自分が自分でなくなり、テレビ画面を見ているように自分の行動を眺めていたような気がするというのだ。

四部作の中でこのことをもっとも象徴的に示すのが、自分に起こる出来事のニュース化である。Harry は心臓の冠状動脈の血管拡張手術 (angioplasty) を受けるが、そのとき、彼の状況はいろいろな計器のバラバラなパターンとなって、隣室に置かれた何台ものモニターの画面上に映しだされ、大勢の医者や看護婦が入れ替わり、この「処置」 (procedure) を観察する。このことが Harry の視点で伝えられ、彼はそれをテレビの番組名をもじって「ラビット

・アングストロム・ショー (“The Rabbit Angstrom Show” –1296)」と名付ける。さらに、局部麻酔で手術を受けている Harry は、医者の勧めに従って、目の前にある X 線透視装置のモニターで、カテーテルによる処置の状況を見ている¹⁶。動く心臓、ひくひく進むカテーテル、その先端のバルーンから飛び散る食塩水。それらが Harry の視点から語られる。このことは、現在、ひとの生死という重大かつ深刻な出来事さえも、ヴァーチャルな情報——現実から遊離した現実＝幻影——ないし消費される商品 (commodity) にされて、人々はそれを、ちょうど Harry が自分の心臓手術をどこか冷静に眺めているように、単なる出来事、一つの情報として、冷ややかに眺めることを示す。

Turning his head to the left, Rabbit can see ... the shadow of his heart on an X-ray monitor screen, a twitching pale-gray ghost dimly webbed by its chambered structure and darkened in snaky streaks and bulbous oblongs by injections of the opacifying dye. The thin wire tip of the catheter, inquisitive in obedience to Dr. Raymond's finger on the trigger, noses forward and then slowly eels, in little cautious jerking stabs, diagonally down into a milky speckled passageway, a river or tentacle within him, organic and tentative in shape where the catheter is black and positive, hard-edged as a gun. Harry watches to see if his heart will gag and try to disgorge the intruder. (1297-98)

こうして見ている自分の心臓の処置は、映像として消費されている客体であるが、一方では Harry の命に直接関わっているのである。医師が「さあ、面倒なところだ」と言うのを聞くと脈が速くなり、モニターに映る拳のような形の心臓が怒ったように動く。Harry はそれを眺めている。

The mechanically precise dark ghost of the catheter is the worm of death within him. Godless technology is fucking the pulsing wet tubes we inherited from the squid, the boneless sea-cunts. He feels again that feathery touch of nausea. Can he possibly throw up? It would jar and jam the works, disrupt the concentrating green tummocks he is buried beneath. He mustn't. He must be still. (1298-99)

「もし下降動脈に側枝動脈ができていなかったら、カテーテルをふくらませると血流が止まり、即、心臓発作の再発だ。カメラの前でね」と警告されているのだ。このとき、Harry の視線の客体であるはずの映像が、恐怖をもたらす主体となる。

The tense insufflation repeats, and so do the images on the TV screen, silent like the bumping of molecules under the microscope on a nature program, or like computer graphics in an insurance commercial, where fragments flickeringly form the logo. It seems as remote from his body as the records of his sins that angels are keeping. Were his heart to stop, it would be mere shadowplay. He sees, when the catheter's bulge subsides a second time, ... He feels blood flowing more freely into his heart, rich in combustible oxygen; his head in gratitude and ecstasy grows faint. (1299)

幸い、側枝動脈ができており、カテーテルは成功のうちに「処置」を進めてゆき、血管は広がり、Harry は酸素を含んだ血液が心臓に流れるのを感じる。ここでは、映像が人間の感覚すら支配するのだ。消費しているはずの主体は、いつの間にか客体になっている。立場が曖昧というのではない。主・客の別が不安定になるのである。

おわりに

以上、Rabbit 四部作の記述をめぐって、幾つかのことを検討したが、テキストに現れている時代認識、歴史感覚と、断片化したそれでいて詳細な情報がいかに現実をデータ化して、実感を希薄にしているか、その一例を挙げて、締めくくりとする。Harry が血管拡張手術を受けて退院した日に散歩の途中ミニマーケットで買う一袋99セントのコーンチップスの袋の説明書きである。データーだけの無機質な単語のつながりはバラバラの情報を伝えるだけであるが、この中には Harry の生命に影響を及ぼす（主体となる）内容物が含まれているのである。

NET WT. 6 1/4 OZ. 177 grams. *Manufactured by Keystone Food Prod., Inc., Easton, Pa. 18042 U.S.A. Ingredients: Corn, vegetable oil (contains one or more of the following oils: peanut, cottonseed, corn, partially hydrogenated soybean), salt.* (1347)

注

本稿は日本アメリカ文学会関西支部例会（2000:06:17）で発表した「歴史と主体：Rabbit 四部作における歴史——Hawthorne と比較において」を大幅に改稿したものである。

- 1 「時代と小市民の生きざま——Rabbit 四部作における歴史——」『言語の空間——牛田からのアプローチ——広島女学院大学開学五十周年記念論文集』（東京：英宝社，2000:03）pp.169-85.
- 2 Harry が勤め帰りに父親と一杯やる酒場で、音を消したテレビがアポロ11号の発進の光景を繰り返し放送している。しかし、そこに集まっている客たちは仲間との談笑に忙しい。
- 3 Edward Vargo は *Rest* を書くときにアップダイクが集めた新聞記事や種々の商品の包み紙などが Harvard 大学図書館に保管されていることを報告している。
- 4 アップダイクは Harry の姓 Angstrom が angst という語に関連していることを認めている（*Hugging the Shore* 850）。Cf. angst [G.] Anxiety, anguish, neurotic fear; guilt, remorse. (OED)
- 5 “The only way to get somewhere, you know, is to figure out where you’re going before you go there.” (R.A. 26) これに対して Harry は “I don’t think so.” と答えるが、確信がなくてのことではない。酒の匂いを嗅いだからだ。
- 6 Tothero のことばと行動の矛盾（Harry に家に帰ることを勧めながら、コール・ガールの Ruth を紹介する）、*Run* の終わりで Tothero が入院していることには象徴的な意味が読みとれる。
- 7 “the most dissentious American decade since the Civil War” (*Hugging the Shore* 858)
- 8 One of the things Harry has always enjoyed about Charlie is the man’s feel for the big picture; the two of them used to stand by the display window over at the lot on dull mornings and rehash the day’s news. Rabbit has never gotten over the idea that the news is going to mean something to him. (1261)
- 9 この立場はまた、「見られる」対象 (object) となることであり、高校時代のスポーツ・ヒーローの姿であり、*Rest* で得意げに独立記念日のパレードの先頭を進む Harry に通じる。自ら消費されてもいるのだ。だが、このパレードでは彼はアンクル・サムの仮装をしているのである。細かく論じる余裕はないので指摘するだけにとどめる。
- 10 “... That’s part of the technical picture, that’s where the economy comes. Offset, you operate all from film, bypass hot metal entirely. Go to a cathode ray tube, Christ, it delivers two thousand lines a minute, that’s the whole *Vat* in seven minutes. We can keep a few men on, retrain them to the computer tape, ... I’m afraid you’re far down the list. Nothing to do with your personal life, understand me – strictly seniority...” (562-63)

- 11 He watches the line of water slide slowly and evenly down the wall of the tub, and then with a crazed vortical cry the last of it is sucked away. He thinks how easy it was, yet in all His strength God did nothing. Just that little rubber stopper to lift. (237)
- 12 Schiffはそのことを “From the beginning Harry has sought to satisfy his body, principally through sex and athletics, but now decades later [in *Rest*] his appetite has more to do with eating ...” (Schiff 59) と指摘している。
- 13 E.g.: Now the *News-Press* wears daily banner headlines tracking Hurricane Hugo – *Deadly Hugo roars into islands, Hugo rips into Puerto Rico...* Mrs. Zabritski turns those veiny protuberant eyes up at him ... and pronounces, “Terrible thing.”
 “What is?”
 “The thing coming,” she says, ...
 “Oh, it’ll never get here,” Harry reassures her. “It’s all this media hype. You know, hype, phony hullabaloo. They have to make news out of something, every night.” (*R.A.* 1494)
- 14 E.g.: A sign offers *Pecan Rolls 3 for \$1.00*. Bigger signs in Hispanic colors, orange and yellow on black, lime green, splashy and loud, miles and miles of them, begin to advertise something called South of the Border. *Bear Up a Leetle Longer. You Never Sausage a Place!* (1458)
- 15 Cf. Jean Baudrillard, “The Gulf War: Is it Really Taking Place?” *Postmodern Debates* 63-74.
- 16 Cf. “We’ll give you a treat. You can watch the whole procedure on TV. You’ll be under local anesthetic, it’ll help you pass the time.” (1296)

引証資料

- Broer, Lawrence R. ed. *Rabbit Tales: Poetry and Politics in John Updike's Rabbit Novels*. Tuscaloosa and London: U of Alabama P, 1998.
- Baudrillard, Jean. “The Gulf War: Is it Really Taking Place?” *Postmodern Debates*. Ed. Simon Malpas. Houndmills, Hampshire: Palgrave, 2001.
- Campbell, Jeff H. “‘Middling, Hidden, Troubled America.’” Broer, Lawrence R. ed. *Rabbit Tales: Poetry and Politics in John Updike's Rabbit Novels*. Tuscaloosa and London: U of Alabama P, 1998, 34-49.
- Lyotard, Jean-Francois; 小林康夫訳 『ポスト・モダンの条件——知・社会・言語ゲーム』 東京：水声社，1986.
- Ristoff, Dilvo I. “Appropriating the Scene: The World of *Rabbit at Rest*,” Broer, Lawrence R. ed. *Rabbit Tales: Poetry and Politics in John Updike's Rabbit Novels*. Tuscaloosa and London: U of Alabama P, 1998, 50-69.
- Schiff, James A. *John Updike Revisited*. New York: Twayne, 1998. (Twayne's United States Authors series 704)
- Updike, John. *Hugging the Shore*. New York: Knopf, 1983.
- . *Rabbit Angstrom: A Tetralogy; Rabbit, Run, Rabbit Redux, Rabbit Is Rich, Rabbit at Rest*. With an Introduction by the Author. New York: Everyman's Library/ Knopf, 1995.

- Vargo, Edward. "Corn Chips, Catheters, Toyotas," Broer, Lawrence R. ed. *Rabbit Tales: Poetry and Politics in John Updike's Rabbit Novels*. Tuscaloosa and London: U of Alabama P, 1998, 70-88.
- Wood, Ralph C. "Rabbit Angstrom: John Updike's Ambiguous Pilgrim," Broer, Lawrence R. ed. *Rabbit Tales: Poetry and Politics in John Updike's Rabbit Novels*. Tuscaloosa and London: U of Alabama P, 1998, 129-49.